

やり直しのできる社会を！

# 新宿連絡会NEWS

2016.2.21  
VOL. 68

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議  
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10  
関ビル106号 NPO新宿気付  
TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895  
<http://www.tokyohomeless.com>

## 越えられないもの

笠井和明

いつも同じよう、いつも同じ通りの活動を求められている新宿と云う街は、特別な街なのであろうか。

都民の視線は、もはや「ホームレス」にはない。都市公園から大半のブルーテントが無くなった時(子供を安心して遊ばせられるようになって)、日々の忙しい日常から、その話題がなくなると、とたんに関心を失い、東京においてさえ、それはテレビの向こう側で起こっている問題で、ああ、まだ居るの？可哀想になあ、程度にしか多くの人は思わなくなっている。まあ、それは、それで、かつての状況から比較すれば良いことなのかも知れないけれど、残念ではあるが、まだ全部が全部解決した訳ではない。関心があろうが、なかろうが、この広い東京の随所で、路上で暮らさざるを得ない人々は、あまり目立たずとも、現に居る。

ただ寝ることだけが目的であれば、より目立たず、より静かな場所を選ぶ。それ以外の何かを求めると

なると、そうではなくなる。明日の仕事や予定がある者となない者、その違いは寝場所も分ける。その違いは「見えるホームレス」と「見えにくいホームレス」の差でもあるが、見えにくいからと言って、そこを、あえてクローズアップさせることが、どれだけ本人達にとって迷惑行為なのかを、マスコミも、社会学者も、そして自称支援者達も知るべきであろう。コアな人以外、知らなくて良い事はたくさんある。「さほど困っていない人々」をいかにも「深刻に困った人」に仕立て上げて、社会を糾弾するのが支援者の役ならば、私は支援者などとは呼ばれたくない。今の時代、「新たな貧困」を発見するのが流行っているのは、世間が他人の不幸話を欲しているからであり、富裕層、中間層の「ガス抜き」が、文化として必要であるからでしかない。ま、そんな構図は昔からであるが、世間が弱い人々を求めているだけならまだしも、それをあえてデッチあげるのは、ちと違うと云うか、やり過ぎでないのかと思うのである。

本当に困った(医療問題、就労問題等)時の相談なり、ホームレス状態が長く続く人々なら、無料もしくは定額で宿泊できる場所なりの正確な情報の提供と、その仕組みは、「見えにくいホームレス」者に対して必要である。また、緊急時に対応した見守りなり、警備なり、緊急対応体制も意識的に必要である。しかし、寝静まっている人々を叩き起こし、「善意」や「悪意」を押し付けようとするのは、これは不要である。

こんなこと常識であると思うのであるが、路上に寝た事がない人々、路上で寝ると云う行為がどのような営為であるのかを考へもしない人々が行なう感情的行動は、大概にして当事者のためにはな





っていない。

自分の「正義」で他者の生き方を変えようとするからである。

それは、「迷惑論」や「見てくれ論」で、寝床を「排除」する、かつての東京都（青島都政前期）の論理と同じである。

まあ、「動機が不純」と云う奴である。

この種の問題の「対策」は、結果として「排除（そこからなくすこと）」につながる。クライアントがそこから居なくなる、そこでの生活から脱することを目指さない限り、それは路上生活者対策とは言えないし、そう評価もできない。

しかし、それは、緊急時以外は押し付けてはいけない。可能な限りの複数の選択肢を提示しなければならない。即断させてはならない。何よりも肝心なのが本人の意思であり、それを促すため、話し込まなければならない。

およそ15年程前から、東京の路上生活者対策はこのように変わり、そして、焦らず、じっくりと、その仕組みを作り、実践して来たことが、路上で暮らさざるを得ない人々の現象と、その動きを作り出して行ったと、私たちは考えている。あの施策、この施策ではない。根拠法の有無、計画の有無、そして、それに取り組む姿勢の問題である（ちなみに、新宿区は「第Ⅲ期ホームレスの自立支援等に関する推進計画」を策定し、この1月に公表しているので参照して頂ければ幸いである）。

このことが評価されていないと云うか、理解していない人々が、法律を作った国や、行政レベルでも居る（もちろん民間では沢山居る）。

と、云うか、もはや関心がない（苦情がない/対象が見つからない）ので、どうでも良いことなのであろう。

この何年か、連絡会が重点的にやって来たことは、かつての「地域生活移行支援事業」（今思えば、都区のみならず官民協同大事業とも云えるものであった）の時、判断は任せると言い、そして結果として残った仲間への、事業終了後から今日までに至る見守りであり、相談があった時の対応であり、その移動場所の確保であった。結果、3年前、戸山公園で常設テントがなくなり、昨年度だか、新宿中央公園でも常設、半定住テントがなくなり、炊き出しもなくなり、そして、一昨年から今年にかけ明治公園（新宿区側）でも定住テントがじょじょになくなり、そして公園までもがなくなった（なので、明治公園は対策上は「消化不良」なのであるが）。

口の悪い連中からは「仕掛けて逃げた東京都の後始末代行」と言われ、「何もそこまであんならがやらなくとも」と白い目で見られたりもしている。しかし、あの時、判断できずに残った仲間は、その場から去る多くの仲間を見つめて来た。自分もいつかチャンスがあると信じ、残った仲間も多い。それを東京都の都合だけで、「芽（一度は夢見た期待）」をつぶすのは間違っていると思うのである。包摂しかけておいて、突き放し、「棄民化」させてしまうのであれば、対策の名に恥じる。包摂しかけたのなら、誰が何と言おうとも、誰の関心が薄れようとも、とことん包摂（「一億総活躍社会」？）しなければならないと思うのである。

新たな貧困の発見により自分は支援の対象だと勝手に思い込み、自立支援センターが良いのか、生活保護が良いのか、どちらの方が金が多くもらえるのか、と皮算用し、まわりにベラベラ喋っている地方から来た若い連中に比べたら、路上に黙って居続けて来た仲間の方が、それが、かなり少なくなったとしても、それが、下どまりしたとしても、優先順位は先だと思し、人がどう生きるのかを示す社会（都市、寄せ場、宿場町）が、諦めてはいけない課題なのだと思うのである。

たとえそこが、排気ガスを直接吸い込むような道路や、通行人との軋轢（苦情、嫌がらせ、襲撃等）を生む歩道の上で小屋を建てていても、今は人道上あまり問題にもされない（管理上も住民との軋轢が少なければあまり問題にもされない）。公園で寝る事ができないから、水場に近しい公園の近くの道路を睡眠場所として選んだのだろうが、「半定住」と呼ばれる生活形態は、ある意味、「流動層」より不安定なのかも知れない。とはいえ、もはや公園定住化の時代には戻れない。だったら公園に泊めれば良いではないか、なんて無責任なことも、その時代を知

っているから言えない。進むべき道は、その生活から脱し、雨露しのげる宿を見つけ、生活を再建することだと思うのであるが、今有る特定の関係性の中から自分だけ飛び出ると云うのは、なかなか勇気のいる行動である。

今年のように、季節が後押しをせずに、おかしな暖冬の際は尚更そうである。それでいて、急に厳冬になったり、雪が降ったりと、安定しないから判断は毎日のように揺れる。

かつての公園での対策であれば、ある程度の集団性は何となしに担保されていた。移り先が同じであったり、近隣であったり、アパートであったとしても実態としてグループホーム的になったりもしていた。

しかし、今は、個別である。移転先が宿泊所等なら、同境遇の仲間達の関係性はあり、傷のなめ合いぐらいは出来るが、いずれにせよ、そこに新たに入る者は、関係性を作り直さなければならない。個室アパートなら、尚更悲惨で、すべてを自分でやらなければならないし、やらなければ自立とは見なされない。隣は誰だか分からない。生活リズムもバラバラで、朝、いつものように廊下の掃除をしても、誰も通りはしない。今の東京のアパートは江戸の長屋にはなっていないのである。

独りで寝ている者は、明日の仕事や予定がある者で、それが無い者はたいがい、何人かで寝ているものであり、それがたいした関係性でなくとも、そこにある関係性の方が、同境遇者ではない他人が話す夢話よりも、より安心である。

判断をしなければならない時は、それはそれで時間がかかったりもする。これは、公園の時と同じである。猫のせいにしたり、雑業のせいにしたり、仲間のせいにしたり、支援のせいにしたり、居残る選択肢を次々と挙げる。それを一つひとつ、潰していく作業もまた時間が必要である。思い込みもあれば尚更時間は浪費する。そして、突然気が変わったりもする。

簡単に路上からの脱却であるとか、自立であるとか、なんだかんだと人は言うが、それは、それで、色々な事情が絡み合うだけに、そう簡単なものではないし、双方の努力がマッチングして初めて、一歩前に進むことができるだけである。病気の仲間さえ、ここから早急に動かなければ命を削ると言うことが、双方分かっていたとしても、関係性を築いて来た我々がいくらそれを言ったとしても、医師や救急隊員がそれをいくら説得したとしても失敗をする…。

もちろん、時間がかかると言っても、無尽蔵にそれがある訳でもない。無駄な引き延ばしをしている訳でもない。時間切れになって、他の力が働き、失敗をすることもある。居場所を出され、関係性や、管理者や担当区が変われば、また一からやり直しである。

まあ、サッカーの試合ではないのだから、どこがその試合の「ゴール」なのかは、他人が決めることはないのかも知れない。

やり直しはもはや出来なくても、一発逆転なんてこともあると、そんなかすかな希望だけでもこの世は生きられるのだし。

未だ、このように、我々は路上で迷い、のたうちまわっている。しかし、見棄てることだけはしたくない。共に、もっと、もっと生きようと、声をかけ続ける。その声が都会の暗闇に、空しく響こうとも。

新宿の公園も長い時間をかけ、ようやく終わった(東京都全体では終わってはいないが、その手法は「新宿方式」で証明済みなので、それを真似すればどこの区でも出来る)。そろそろ次の難題に我々は舵を切る頃である。

そんなことを思いながら、いつもと同じよう、いつも通りの活動を、この残酷な冬のなか、連絡会は続けています。

(了)



医療班の越年期の活動は、昨年から連絡会の「おにぎりパトロール」に同行する訪問健康相談活動を行っている。野宿者の生活場所に訪問し、健康状態を聞き取り、血圧計測・市販薬提供を行った。また体調を崩し、野宿生活が困難と判断された人は連絡会のシェルターに保護し、越年明けまで健康状態を見守った。また、福祉事務所が開く1月4日に生活保護申請に同行した。12月31日はパトロールを行わず、中央公園で年越しイベントが開催されたため、医療班もイベント会場で机出し健康相談を行った。

活動期間：2015年12月29日から2016年1月4日まで7日間

活動場所：新宿中央公園・西新宿・新宿駅周辺、高田馬場（12月29日-1月3日、除12月31日）

東口ルート：中央公園・甲州街道・新宿駅南口・東口・西武新宿駅

西口ルート：中央公園・都庁下・西新宿・新宿駅西口

活動内容：パトロールに同行し訪問健康相談：夕方 東口ルート・西口ルート(17:00-20:00)

深夜 西口地下ロータリー（22:30-23:30）

高田馬場の連絡会シェルター保護者健康相談(20:30-22:00)：

年越しイベント開催中机出し健康相談（12/31中央公園水の広場、17:30-21:00）

生保申請手続き同行（1/4 新宿福祉事務所）

医療班参加ボランティア 25名（延べ38）：医師9、歯科医師2、看護職9、薬剤師2、

MSW1、一般2

	東口ルート	西口ルート	深夜パト	年越し	合計（延べ数）
野宿総人数（平均）：	50	75	76	100	1109
医療班対応者数（平均）：	25	19	18	18	327
血圧（合計）：	45	5	9	6	59
診察（合計）：	1	2	2	0	5
紹介状（合計）：	1	2	1	0	4
薬（合計）：	63	77	80	14	234

提供薬（延べ数）：風邪薬123、鎮痛薬16、胃腸薬71、湿布20、軟膏25、マスク61、絆創膏4

### <医療班対応者の経過>

連絡会シェルター保護者：2名

40代男性 心疾患・精神疾患 1週間前施設自己退所後野宿

12月29日深夜パトからシェルター保護

1月4日新宿福祉事務所に同行。

他自治体での生活保護継続中であり、一旦元の保護自治体に戻るよう指示されるも、「周囲との人間関係の問題があり、元の街に戻りたくない。」との事で申請辞退し、路上へ。

70代男性 糖尿病治療中断・両膝関節症 1ヶ月前退院後野宿 膝痛強度で歩行困難

12月30日深夜パトからシェルター保護  
年金受給中 1月4日新宿福祉事務所に同行。  
寮での集団生活希望せず、個室であれば生活保護受給希望あり。  
個室の宿泊所空きがなく、本日の申請を辞退。  
再度相談する事となる。連絡会としてもパトロールで声かけを続ける事にした。  
1月20日新宿警察から「本日路上で死亡されていた。」と連絡あり。

シェルター保護者以外：4名

- 70代男性 右下肢蜂窩織炎 12月30日医療班相談、紹介状  
1月4日新宿福祉来所 皮膚科受診
- 40代男性 右手関節骨折疑い 1月2日医療班相談、紹介状  
1月4日新宿福祉来所 整形外科受診 施設入所
- 60代男性 高血圧治療中断 1月2日医療班相談、紹介状 中野福祉に自分で相談に行く
- 70代男性 糖尿病治療中断 1月2日医療班相談、紹介状 1月4日新宿福祉来所せず

<2015-16年越年集中活動を振り返って>

まず、せっかく連絡会のシェルターで保護し福祉につなげようとした方が、2週間後に路上でお亡くなりになった事が誠に残念です。ご冥福をお祈り致します。

1月4日新宿福祉に同行し生活保護申請をしたのですが、施設の大部屋での集団生活を望まず、個室への入所を希望されていたのですが、すぐ対応出来る施設が空いていなかった事が当日生活保護申請辞退をされた主な理由でした。生活する事が出来るレベルの年金額でしたが、糖尿病や関節症の治療費を支払う事は当然出来ないのも、連絡会と医療班のスタッフばかりでなく福祉の担当者も熱心に生保受給を勧めたのですが、申請を辞退されました。「これからも相談を継続していく」事をお約束していました。

「路上死をなくす」事を目標に活動を続けてきた我々にとって、痛恨の極みといえる事態ですが、くじけないで今後も活動を継続していこうと思います。

新宿連絡会医療班代表 大脇甲哉



越年のパトロールは12/27-1/3のうち、31日を除く7日間行った。新宿近郊と近傍を回った。昨季同様おにぎり、カイロ、情報紙を提供。適宜、車で毛布を届け、シェルター利用者を運んだ。寒波、雨天なしの穏やかな一週間だった。

医療職に助けられた面が大きい。問診、投薬、処置のほか雑務をこなした。顔ぶれがそろい、巧みな編成だった。対応者に重病はなく、最近の活動の再現を呈した。基礎的な健康の底上げを感じさせる変化といえる。

接する人数は28日～2日にかけて、早い時間帯(17:00-20:00)で明らかに少ない。日によって、普段の日曜日の半減。結果、おにぎりがかかり余った。遅い時間(22:30-)に用いれば即解消だが、来季は数量調整があつていいかもしれない。

行く先としてよその炊き出し、教会、仕事と考えられる。各々、20～30人ずつ分散したか。今の形の越年を続ける限り、この傾向が定着しそうな気がする。

新来は例年ほど多くなく、29日以降ちらほらといった感じ。むしろ他区からの支援者が目立った。豊島、渋谷、杉並あたりから個人、団体が参入。各自の役を果たした。

野宿の醍醐味を雑多な交流に求めるつわものがある。新宿はその地にふさわしい。「ホームレスをしているといろんな人に会えて、いろんな話ができる。それが面白いよね。…裸になってしゃべれば、人間はみんないい人ばかりだよ」(神戸幸夫、大畑太郎『新 ホームレス自らを語る』)。

反面、接触が常に奏効するわけではない。今回シェルターを使い、年明けに福祉同行した一人も、好

転に至らなかった。その後、死亡の報が入った。条件的に恵まれ、そこまで追い込まれずすむはずだった。

「見えないホームレス」より、「見えているのに、どうにもならない」ケース。通行人には奇異に映るだろう。団体へ問い合わせがくる。あんなひどい状態で、なぜ放っておくのかと。背景は複合的で不信、不通、てい観、障害、依存など。どれだけ強く介入するか、判断は悩ましい。

ドヤ街の不安定な居住を逆に、「巨大な解放病棟」(須藤八千代『ソーシャルワークの作業場 寿という街』)と評する向きがある。際どい表現ながら、都心の路上にも何ほどか当てはまる。

死に対してすら開かれている不条理。その危うさに惑いつつ、新宿の街を歩きます。

### 15-16越年事例報告

(あきらめないための覚え書き)

医療とパトロールの報告で触れた通り、越年後に亡くなった方がいます。今回は期間中、初対面の相手に犠牲がありました。今回は、顔なじみと接し続ける過程の出来事でした。両者では失敗の質が異なります。その点を踏まえ、課題をまとめます。

\*路上を巡っていると、働きかけがうまくいかず、停滞に陥ることがある。支援者は二つの方法で納得を試みる。一つは「そのうち何とかなる」、もう一つは「万策尽きた」。実際は、いずれも座視する言い訳になりやすい。根拠の薄い楽観や悲観が事態を悪くする。

\*悪循環は野宿の側にもみられる。故人を含め、仲間から「この先どうなっても構わない」の声を聞く。不遇の先取りは様々に通底する。古くは寄せ場で「労働者の予見的諦観」(寺島珠雄編『釜ヶ崎語彙集』)が指摘された。今は野宿者について「何をしてもホームレスから脱却できないと諦めてしまって」(鈴木文治『ホームレス障害者』)といわれる。さらに「幸福を想い描く意欲すら失ってしまった者」(笹沼弘志『ホームレスと自立/排除』)とも。



\*活動の中・長期の目標は、自他の速断を戒め、停滞を揺さぶること。

\*制度の利用は、本人の意思と資格に基づく。それが満たせないと路上に留め置かれ、果ては死に至る。万人に、無条件に向けられていない。「スティグマと生の序列化は、福祉国家の理念自体に内在した問題点である」(山森亮『ベーシック・インカム入門』)。憂うつな限界だが、展望を大きく(再)分配とは別の仕組みを構想してみよう。例えば贈与(としての支援)。

\*困難さの度合いは人それぞれ。より危機的な層が、新宿周辺でおそらく1割(300の野宿があるとし30)前後。今回もその一例。彼らとは個別に、踏み込んだ対応が望ましい。「広く、浅く」の方式は無理がある。山谷出身の活動家によれば、「徹底したマンツーマンの関係は、意外にも良い結果をもたらす」(宮下忠子『赤いコートの女 東京女性ホームレス物語』)。

\*現在の活動は週に一度、延べ200を越す野宿者と接する。うち数人に特化し、週に2~3度会いに行ければ、理解はかなり進む。密な関係は潜在的な需要をあぶりだす。適した医療、福祉、民間資源へ受け渡す可能性が高まる。

\*繊細なやり取りは息が合っこそ。相性が悪いと反発し、お互い逃げ場を失う。そういう時、代わりの手があると助かる。事情に通じた者が入れ替わり、交渉を引き継ぐ。

\*訪問の頻度、連携先、要員の確保。これらを独りの支援者でまかなうには荷が重い。個別化は組織化と不可分。

\*当人に対し、先の見通しを段階ごとに示せるといい。例えば数か月後、数週間後、数日後といった具合。間近なところについては、なるべく日時や場所の約束を具体的に。今回の件で、特にここが欠けていた。早い時点で、役所への再同行をしっかりと打診しておけば、結果は違ったように思える。

\*支援者は成果を欲しがらる。それが見込めない相手とは、疎遠になっていく。そのことにもっと自覚的であるべきだろう。介護現場の経験則に耳を傾けたい。「ケアとは、ケアする者とケアされる者とのあいだの、長期にわたる、忍耐のいる相互関係である」(上野千鶴子『生き延びるための思想 新版』)。

\*依存症からの脱却では「底つき体験」の重要さがいわれる。路上でも似たことが起きる。ひどく行き詰まった相手が、不意に前向きになる。その際は労を惜しまない。遠くの福祉事務所でも、病院の長時間の検査でも付き合う。本人にとって、大きな転機かもしれない。元は十分取れる。

\*支援とは回復の途上の、重要な局面に立ち会うための営みの謂い。「危機を克服しようとするさまざまな努力は、その人にとって自己の全存在をかけた力を要求する。それは、単にその状況をやり過ごすのとは違う人生の転換点である。…その思いを共感できる時こそが、ケースワークの実践的転換点である」(須藤八千代『歩く日 私のフィールドノート』)。

越年パトロール記録

コース		時間	日付							平均	昨季平均
			12/27	28	29	30	1/1	2	3		
中央公園	南	17:00~	38	25	20	32	31	27	38	52	54
	北		25	20	17	23	23	23	25		
新宿駅	東	18:00~	50	20	35	17	13	31	45	75	71
	西		57	28	38	45	43	55	47		
西口地下		22:30~	65	60	80	76	73	71	81	72	57
延べ計			235	153	190	193	183	207	236	199	182

\*表中は当該の日、時間、コースで会った野宿者数、単位は人。

\*コースの概要は次の通り。中央公園・南=3号街路~ジャブジャブ池、北=木の広場~ポケットパーク、新宿駅・東=甲州街道~大ガード、西=4号街路~小田急。

\*今回、戸山公園を集計から省いた。ほぼ固定で連日20名、昨季も同。延べ計の平均の比較は、その分を除き。

\*おにぎり提供は原則18:00~まで、日平均は戸山公園を加え147人。上記のように残余があれば22:30~に用いた。

## 概数調査報告

### 越年概数調査

	今季	昨季
地下広場	105	118
4号街路		9
中央公園	50	50
駅東口	5	4
西口	35	20
南口	9	9
新宿御苑	8	
西武新宿	8	5
高田馬場	24	28
神宮外苑	16	14
江戸川橋	27	23
紅葉山	7	7
曙橋	8	
計	302	287

越年中、概数調査を行った。終電後、各所で寝泊まりする人数を調べた。前回より地点を加え、微増となった。新宿は複雑で、周辺部を通したほうがわかりやすい。そちらに変化なければ、都心も大差なし。ここ一年、ほぼ横ばいとみていいだろう。

早い時間のパトロールに比べ、深夜の人口は倍近い。寝床としての性格がはっきりしている。特に地下広場はそうだが、果たしていつまで続くやら。

仲間によると、民間と行政の警備が回るらしい。後者からはオリンピックに向け、ほのめかしがあるという。受け止め方は冷静で、とりあえず「やむなし」の姿勢。

彼らは伝統的に変わり身の早さで知られる。「…もっとよい寝場所が見つかったり、また都合が悪いことがあれば去ればよい、そしてまた必要があれば戻ればよい、西口地下はそのような場であった」(狩谷あゆみ編『不埒な希望 ホームレス / 寄せ場をめぐる社会学』)。

ただ、この融通も随時の開放性が保たれればこそ。全面閉鎖となれば、話は違う。今後どの方向を目指すのか、参考となる意見を。「…望むときには安心して野宿ができることだって含み、『住まいの保障』だと思う」(堅田香緒理、白崎朝子ほか編『ベーシックインカムとジェンダー』)。

「ホームレスのいない街」と「ホームレスでも生きられる街」。本番を前に、考えたい論点ではある。

## 新宿連絡会 会計報告

2015年度11月～1月収支

今期も多くのご支援を頂き、ありがとうございます。

頂いたお金は連絡会の運営費や仲間のために全て使い切っております。必要性のある活動が続きますので、今後ともご支援宜しくお願い致します。

勘定科目	金額	勘定科目	金額
<b>I 計上収入の部</b>		消耗品費	55,906
1 寄付金収入	1,083,583	事務用品費	10,849
		事務所費分担金	120,000
<b>計上収入合計</b>	<b>1,083,583</b>	衛生管理費	9,250
		支払手数料	8,250
		車両費	77,738
<b>II 計上支出の部</b>			
<b>1 事業費</b>		計上支出合計	1,105,220
弁当おにぎり事業	173,581	計上取支差額	△21,637
越年越冬事業	555,625	前期取支差額	△391,443
その他活動事業	47,840	次期繰越金	△413,080
<b>2 管理費</b>			
旅費交通費	3,720		
通信費	42,461		

●活動カンパ 振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.giveone.net/>「Give One (ギブワン)」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします●

★郵便物は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。